

第1章 ヒロシマ、ビキニを越えて……………一

1 「札束」登場……………二

2 事始めのころ……………五

改進黨四人男 学界の足ぶみ 最初の平和利用論 初期
の雑誌・単行本

3 第五福竜丸と“許容量”……………一五

ビキニ事件顛末 “許容量”をめぐって

4 アイソトープは戦前から……………二〇

ラジオアイソトープの輸入再開 戦前の研究

5 てんやわんやのスタート……………二五

とにかく体制作り 海外調査団の苦勞 研究方針打ち出す

第2章 「三原則」の誕生……………三一

1 学術会議の平和声明……………三二

“寝耳に水”の学界 “公開、民主、自主” 公開の原則の意味

2	原子力三法の成立……………	三七
	勉強した“四人のサムライ” 実現しなかった行政委員会	
3	日米協定をめぐる論争……………	四〇
	米、濃縮ウランの提供申入れ アメリカの改正原子力法	
	機密保護法が必要か 協定の成立	
第3章 開発体制の骨格整う……………四五		
1	ノーベル賞かつぎ出し……………	四六
	初代原子力委員の人選 “五年後には原子力発電を” 湯川	
	さんの辞任	
2	日本原子力研究所生れる……………	五一
	研究炉計画固まる	
3	敷地選定の二転・三転……………	五四
	東海村に原子力センター 研究炉の建設すすむ	
4	原子燃料公社の設立……………	六三
5	まぼろしの炉・さすらいの炉……………	六四

第4章 産業界の体制づくり……………六九

1 日本原子力産業会議の発足……………七〇

三つの流れ 正力さんの提唱 第一回アイソトープ会議開

く 産業使節団と原子動力シンポジウム 日米合同会議と

I A E A参加 次々と原産地方組織

2 五グループの旗上げ……………八〇

グループの結成 技術提携と研究所の整備 まずは「赤字

白書」

第5章 原子力発電の「早期開発」……………八七

1 コールダホールの輸入……………八八

ヒントン卿の来日 正力―河野論争 日本原子力発電(株)の

誕生 剛構造と柔構造 サケ缶の怪 安全性の公聴会開

かれる 地元茨城県の動き

2 損害賠償制度の導入……………一〇四

英国から「免責」の申入れ 原産に賠償法委員会 法の根

本思想を変える 責任集中と無過失責任

第6章 原研の混迷深まる…………… 一一一

1 待遇改善でストに突入…………… 一一二

原子の火消える GE社、運転停止を指令

2 「原研のあり方」で沸く…………… 一一八

理事長に丹羽氏登場

3 半均質炉消える…………… 一二一

「国産動力炉」に活路

第7章 東海村、“原子力都市”へ…………… 一二五

1 東海村の地帯整備…………… 一二六

最初の中曽根構想 原産、地元の協力で青写真 整備は現

行法のワク内で 五カ年計画で実施さまる 地元の悲願、

水戸射爆場の返還

2 商業発電始まる…………… 一三五

難工事、五百メートル沖から取水 材料、設計に問題続出

ついに臨界—四十年五月四日 待望の営業運転に入る

3 スローダウンから上げ潮へ……………一四六

赤字に耐えながら 一、二号炉以降へ熱気

第8章 軽水炉への傾斜と長期予測……………一五五

1 軽水炉の輸入を急ぐ……………一五七

2 二〇〇〇年までの長期予測……………一六〇

「総合エネルギー政策」の出発

3 受注残高一千億円を越える……………一六六

核燃料加工に外資が進出

第9章 動力炉自主開発のスタート……………一七三

1 政策論議の本舞台へ……………一七五

2 コンセンサスへの努力……………一七八

国内サイクル論の原型 新型転換炉に消極論

3 ナショナル・プロジェクトの誕生……………一八四

4 フェルミ炉を進めた人々……………一九三

第10章 立地環境問題ことはじめ……………一九五

1 安全対策と立地……………一九七

立地問題のオープンな論議へ

2 産業との共存へ……………二〇三

“野放しの工場排水”に不信感 共存の原則うち出す

3 放射能の監視……………二〇九

佐世保の異常放射能事件 海外の実情調査へ

第11章 三者三様、核燃料政策の船出……………二二七

1 核燃料政策への前進……………二二九

使用済み燃料政策の流産 核燃料政策の基本方針出る 濃

縮ウラン、プルトニウムの民有化

2 再処理工場設置の難航……………二二七

東海炉の再処理工場 設計作業のおくれ 茨城県の反対運

動 情勢の好転—うけ入れへ 建設資金問題

3 プルトニウム燃料の開発……………二三八

燃料研究施設の完成 サーマル利用研究の進展 高速炉用
燃料の研究開発

4 ウラン資源の確保……………二四三

菅さんの呼びかけ 海外開発の体制をめぐって—長期購入か
開発輸入か 開発の主役は“誰” カーマギー、デニソン
との共同探鉱 ニジエールで共同探鉱へ フランス・ニジ
エールへ調査団 海外ウラン資源開発(株)の設立

5 濃縮ウランの調達……………二六三

濃縮研究の経緯 濃縮ウランをめぐる国際情勢 アメリカ
の民営移管問題 研究開発前進のきざし 昭和六十年まで
に年産五千トンSWU

第12章 動力炉の多角化進む……………二七七

1 新型炉の開発へ……………二七八

新体制で動力炉開発 新型炉開発の見直し “夢の原子炉”
に火 初の純国産発電炉「ふげん」が臨界

2	原子炉多目的利用の気運	二九六
	多目的利用への取組み	
	原子力製鉄の“緊急性”	
	コンビ	
	ナート・モデルの検討	
第13章	放射線影響と医学利用	三〇五
1	ビキニを契機に	三〇六
	放医研の発足	
2	医学用炉とサイクロトロン	三二二
	環境への影響と分析化研事件	
3	線量研究とガン治療	三一九
第14章	核拡散防止条約の調印まで	三二三
1	核拡散防止をめぐる米ソの思惑	三二四
	米ソ共同草案の提出	
2	非核保有国の追及	三三四
3	わが国も賛成投票へ	三三六
	核拡散防止条約の成立	

第15章 核燃料サイクルと核不拡散の波……………三四三

1 ウラン資源の確保へ……………三四五

海外ウラン探鉱へ促進策 ウランの国内資源とウラン調達

2 ウラン濃縮の多角化……………三五三

自立への技術開発 遠心分離法へ集約 遠心分離機の性能
向上 濃縮役務供給の競争

3 転換、加工部門の整備……………三六八

事業体制整う ジルコニウムの技術開発

4 再処理と米核不拡散政策……………三七三

動燃再処理施設の建設 降ってわいた米国からの“待った”
核不拡散のホットな季節 日米交渉―原子力ナシヨナリズム
の噴出 共同決定に漕ぎつけるまで

5 NPTとIAEA……………三九三

保障措置問題をめぐって NPT参加―九十七番目の批准

6 核燃料サイクルの確立をめざして……………四〇二